Little Women に見る新たな時代の女性像

陳懌懿

はじめに

本論では、Louisa May Alcott の *Little Women* の物語を取り上げ、従来自伝的な口当たりの良い児童小説と捉えられてきた本作を、末娘の Amy March に着目することで、新時代において女性たちが世界を主導するという進歩的な世界観が提示されていることを論証する。Amy は Jo のような派手なふるまいはしないが、芸術を目指す高い志を持ち、そうでありながら自らの才能の限界を認識した上で社会貢献を果たしていると考えられる。Amy の持つ男性観も、芸術的な内面を備える点に惹かれることから、Amy は家庭と社会を先導するキャラクターとして描かれると考えられる。March 家の女性像を、Amy を中心に考察することで、*Little Women* が新たなジェンダー観が展開された、野心的でかつ魅力的な小説であることを実証したい。

1. Amy の芸術性

少女期の Amy は将来芸術家になることに目指し、この野望を持っていることから、伝統の女性像と大きく違っていることが分かる。彼女は様々な新しいものを見る目を持ち、"mud pie" (270)、"pen-and-ink drawing" (270)、"poker-sketching" (270)、"charcoal portraits" (271)などにチャレンジして、芸術の才能を示したのである。沢山の失敗をしても、挫折しても、姉妹たちに嘲笑されても、Amy は自分の才能を疑うことがなく、困難にもかかわらず、芸術家になりたいという夢を追い続けていた。ここで、Amy が芸術性を持ち、夢を諦めることなく、精神的に独立している少女であり、伝統的な女性像と異なることが分かる。

2. Amy の自己主張

Little Women 第二作第 7 章では、Amy は Mrs. Chester からチャリティーパーティーの手伝いを引き受ける。彼女は自分に一つの展示テーブルを確保し、そこで自分の作った芸術品を展覧することになった。しかし、Amy は Mrs. Chester の娘 May に嫉妬され、隅っこにある展示テーブルに無理に移動された。芸術の才能を人々に見せるチャンスが奪われた Amy は不当や不公平を感じた。その時、姉の Jo は彼女に、自分の作ったすべてのものをパーティーから家に持って帰るべきだとアドバイスをしたが、Amy は自分の方法でこの問題を解決しようと決心した。彼女は聖書の "sermon"(322)を思い出し、"kindness" (322)と優しさによって、"enemy" (322)を征服し、結局 Mrs. Chester と娘の May のほうが自己を恥じるようになった。Amy は他人の力に頼らず、自分の力で困難を乗り越えた。また、"kindness"(322)という美徳は彼女の精神を浄化し、憤慨や報復をせず、Mrs. Chester と May を許し、優しくしてあげたのである。Amy は自分の力によって、この問題をうまく解決しただけでなく、"little pilgrims" (18)として、しばしばこの作品が影響を受けているとされる『天路歴程』の主人公のように、彼女は精神的な「巡礼」で進歩も遂げたと考える。

3. Amy の自己認識

Amy は芸術へ情熱を持ち、国から出たく、外の世界を見てみたいという気持ちはあった。Aunt March はヨーロッパ旅行を計画し、Jo か Amy かを連れていくつもりだった。Jo は不適切な言葉や行動で、この機会を失ってしまったが、Amy は礼儀正しく、優れる言葉や行動で、ヨーロッパ見学に行く機会を捕まえることができた。ヨーロッパ見学で、彼女は博物館を訪れ、沢山の芸術品を鑑賞したりして、途中、Laurie と出会った。Amy は Laurie に自分の芸術家の夢について語り始めた。Amy は芸術家になりたいけれども、彼女は自分がどれだけの能力を持っているかを認識している。ローマを訪問する時に、Amy は自分に芸術の才能はあるものの、天才とは言えないと自覚した。このように、彼女は自分を過大評価して大それた夢や野望を持つのではなく、自分の能力をはっきり認識し、芸術の"genius" (431)ではないというのを認める勇気があることは、希にしかない特長だと考えられる。さらに、Amy は芸術のみに没頭するのではなく、ほかの才能を磨く決心を示し、機会があれば、"ornament"(431)として、社会に貢献したい気持ちも表明した。彼女は自分の将来へ責任感を持っているだけでなく、当時は主に男性の持つとされた社会責任感も持っていることが分かる。

4. 当時の男性像

Alcott が Amy March を伝統的な女性像から離れた新女性像として創造したのを見てきた。では、当時の男性像はどのようなものだったのかを見ていきたい。男性像については、ヨーロッパ見学の時に仲間となった Fred と、後に Amy の夫となった Laurie について考察しながら見ていきたい。

Fred の初登場は *Little Women* 第一作の第 12 章に、Laurie のイギリスからの友人で、March 姉妹、そして Laurie と一緒にキャンプに行った人物で、騒々しく、後に Jo と喧嘩したり、混乱を起こしたりして、あまり良いイメージがなかった。また、*Little Women* 第二作では、Fred が再び登場して、Amy のヨーロッパ旅行の仲間となった。彼は"delightful manners" (432)を持つ"agreeable young man" (336)と変貌し、Amy に良い印象を与えた。彼の家柄ははっきりわかっていないが、豊かな財産を持っているように見える。Fred は伝統的な女性の理想的な結婚相手かもしれないけれども、Amy は彼のことを尊敬するが、愛してはいないという理由で、Fred の求婚を断ったのである。

では、後に Amy と結婚する Laurie の持つ男性像を見てみよう。Laurie は背が高く、イタリア人のロマンス、イギリス人の紳士の気質、そしてアメリカ人の自由の雰囲気を持っていることで、少女たちが憧れる男性だと考えられる。彼の容貌、服装、そして仕草から見ると、Laurie は教養の良い家庭の育ちということが分かり、Fred と同じように、財産家でもある。それ以外に、Laurie はピアノに情熱を持ち、それは Amy の絵画への情熱と同じだと考えられる。また、彼はピアノがうまく弾けるにもかかわらず驕ることなく、謙虚な態度をとっている。Amy はうまくピアノの弾ける Laurie と、「謙虚」という美徳を持つ Laurie に惹かれたと考える。さらに、大人になった Laurie は "steady" (509)かつ"sensible" (509)なビジネスマンとなり、自分のお金で貧困な人々を助けたり、芸術家の夢を抱く若者を応援したりしている。彼はビジネスマンというより、慈善家だと評価される。

以上の比較を見てみると、Amy は容貌や金銭より、人の内面性に目を向け、Fred ではなく、Laurie を選んだことが分かる。容貌や金銭は重要であるけれども、それよりも重要なものがあり、それは男性の持つ人間性だと考える。

5. Amy の結婚

三女の Beth は猩紅熱で、体が病弱になり、物語の途中で亡くなったが、長女の Meg、次女の Jo、そして末娘の Amy は結婚し、幸せな生活を送るようになった。*Little Women* の第二作の終わりに、March 家の人々が集まり、自分の生活について語り合うシーンで、Amy は "I don't relinquish all my artistic hopes, or confine myself to helping others fulfill their dreams of beauty." (515)を言い、結婚後も、彼女は個人として、夢を追い続けると決心した。Laurie は芸術の夢の持つ人々を助けるが、女性である Amy も社会責任感を持ち、夫と同じことをしている点から見ると、この二人の男女は、平等な関係にあると言えるのだろう。

6. 結論

以上、本稿では、*Little Women* を通して、Louisa May Alcott が理想的だと考える女性像と男女の関係性を考察してきた。Alcott は *Little Women* を通して、伝統的なステレオタイプを打破し、新たな女性の模範像を示した。家庭、仕事、そして夢などをよく調整し、男女におけるステレオタイプに陥らず、生活や将来について熟考し、愛し合う男女が自由に生きることのできる社会は、Alcott の理想的な社会なのではないか。

テキスト

Alcott, Louisa May. *Little Women. Little Men. Jo's Boys.* New York: The Library of America, 2005.

主要引用文献

荒木菜穂「フェミニズム的活動における権力の獲得について」『女性学評論』第 30 号, 2016.
Cheney, Ednah. D. *Lousia May Alcott: Her Life, Letters and Journals.* Boston: Roberts Brothers, 1889.
Eselein and Philips ed. *The Louisa May Alcott Encyclopedia.* Connecticut: Greenwood Press, 2001.
有賀夏紀『アメリカ・フェミニズムの社会史』勁草書房, 1988.
栗原涼子「第一波フェミニズムをめぐる女性運動史」『アメリカ研究とジェンダー』 世界思想社, 1997.
宮崎麻子「四人姉妹と五人姉妹を描き分ける近代文学の物語 『高慢と偏見』『若草物語』『細雪』における姉妹たちの多様性の限界」『言語文化共同研究プロジェクト』大阪大学大学院言語文化研究科,2019.
森有礼「スクリーンの中の『若草物語』 ―映画・アニメ版『若草物語』が描かなかったもの―」『中京大学国際英語学部紀要』中京大学国際英語学部,2020.
森山千晶「『若草物語』の研究 ―四人姉妹の結婚観に触れて―」『たまゆら』比治山女子短期大学国文学会,1989.
長島万里世「Little Women における Louisa May Alcott の女権拡張論」『英文学論叢』第 29 号, 日本大学英文学会, 2008.
長島万里世「『若草物語』におけるルイザ・メイ・オルコットの男女平等観」『英文学論叢』第 58 号, 日本大学英文学会, 2010.
ノーマ・ジョンストン著『ルイザ 若草物語を生きた人』谷口由美子訳, ドメス出版, 2000.